

スイスのツーク湖付近を通過する列車。

鬼頭郁子が案内する ベニス・シンプロン オリエント・エクスプレス

1883年に運行が始まり、数々の歴史の舞台となったオリエント急行。往時の姿をそのままに、欧州を駆け抜ける列車は、まさに誰もが憧れる存在です。今回はフラワー＆テーブルコーディネーターとしてご活躍する鬼頭郁子氏が豪華列車の旅へ誘います。

Article by Ikuko Kito Photographs by Hiro Matsui

VSOE

Venice Simplon -Orient- Express



乗車前にプラットフォームで車掌とともに
写真に収まる鬼頭郁子氏。



写真上／バー・カーではピアノの生演奏が優雅な時間を演出する。
写真下／ディナーやランチをいただく食堂車。随所に歴史を感じる設えが施される。



写真上／ロンドンのヴィクトリア駅からはしばし、プリティッシュ・ブルマン社の車輛が使用される。
写真下／ヴィクトリア駅にあるベニス・シンプロン・オリエント・エクスプレス専用のカウンター。ここでのチェックインで旅が始まる。

※オリエント・エクスプレスは独自の路線を持たず、他の鉄道会社の線路・機関車を使用しているためルートが変更。定期運行はフランスのカレー・ヴィルからパリを通過し、サンタルチア駅に向かう。

トンで下車。いったんバスに乗り換えて、フランスのカレー・ヴィルを経由してベルギーのブリュージュへと向かいます(※)。ここで、ワゴン・リの寝台車輛「ベニス・シンプロン・オリエント・エクスプレス」に乗り換えます。

出発してからは、フレンチディナーをいただき、就寝するのは専用のコンパートメントです。目覚めると、朝焼けのアルプスの景色をのぞみながらの朝食。さらに、スイスを通過しイタリアに入ったあたりでランチ、その後はアフタヌーンティーと、美食と美しい車窓の景色を眺めながら、約30時間をかけてサンタルチア駅へ向かいます。

VSOE

Venice Simplon -Orient- Express



ディナーを終えるとバー・カーはサロンのような雰囲気に包まれる。

歴史や小説の舞台となった 極上なる空間で過ごす列車の旅

最初に夢の豪華寝台車「ベニス・シンプロン・オリエント・エクスプレス」の歴史についてお話しします。その歴史は、ベルギーのジョルジュ・ナゲルマケールス氏が、アメリカのプルマン社の寝台車に感銘を受け、1872年にワゴン・リ社を設立したことに始まります。それまで、ヨーロッパの列車は国ごとに乗り換えていたため、乗り換えなしに長距離を走ることができ、さらに列車で食事のできる食堂専用車輛を持つ寝台車が誕生したのです。

1883年10月4日、パリ東駅からイスタンブールへ向けて初めて出発したオリエント急行は、目を見張るようなコンパートメントを持ち、その内装の優美さは、瞬く間に人々の憧れになりました。

1900年代、アジアや中東へ、旅行を楽しむ利用者が賑わった寝台車は、その後、飛行機の普及により衰退。ついには廃止となってしまいました。しかし、1982年、ベルモンド社の創業者、ジェームズ・シャードウッド氏が当時のままに見事に復活を果たします。以後、優雅に列車の旅を楽しむ人に愛され、今日に至っています。

* *

今回のロンドン〜ベニスのルートは1泊2日の行程です。まずはロンドン・ヴィクトリア駅の専用カウンターでチェックイン。年間を通じてイギリス国内を運行する食堂車輛のみの「プリティッシュ・プルマン」でヴィクトリア駅を発します。

食堂車輛でランチをいただきフォーク



VSOE

Venice Simplon -Orient- Express

車窓の外にはどこを走っていても絵画のように美しい光景が広がる。



写真左／終着駅のベニス、サンタルチア駅にて。
写真右／キャビンに飾られた花は、ロンドンで花を購入し、鬼頭氏自らがコーディネートしたもの。



行き届いたサービスが心地良い。スタッフの笑顔にも癒される。



写真左／車内の調達品はどれもが上品で優雅で。
写真右2点／素材の旨味を引きだした食事は列車の旅の楽しみの一つである。



鬼頭郁子が体験する ベニスへの豪華列車の旅

窓からの優しい光がランチのテーブルを華やかに彩る。



でバー・カーまで行ってみると、まさに写真通りの華やかに着飾ったヨーロッパの社交場でした。

アペリティフをいただき、ルネ・ラリックが手がけた「コート・ダジュール」という名の食堂車で極上ディナーを堪能しました。上質なクロスと磨かれたカトラリー。プレゼンテーションプレートにはラリックの絵柄がリンクされ、アールヌーボー調のディナー皿にも、安定感のあるフォルムのグラスにも、すべてVSOEのロゴが。その後、再びバー・カーで、ピアノの生演奏を聴きながら、遅くまでディジェフティフを楽しみました。

ぐっすり寝た翌朝は、昨晚とはまるで違ったスイスの景色が現れます。素早くベッドを整えてくれたスチュワードが、朝食をコンパートメントまで運んでくれました。そして、ランチまでの間はのんびり読書。長旅の間、好きな花の香りで過ごしたいと洗面所に持ち込んで自分で束ねたブーケが、いつの間にか、素敵なクリスタル花瓶に飾られてテーブルに置かれていました。

その後、ディナーとは違う食堂車輛の「エトワール・ドゥ・ノール」でランチ。至れり尽くせりのサービスを受け、絶景を眺めてのゆったりとした時間。見知らぬ乗客との軽い挨拶。ベルエポックの華やかな時代、鉄道で旅を楽しむ、人生を謳歌する上流階級の人々の気分を味わったような不思議な感覚。ヨーロッパを駆け抜けた豪華列車での一夜は、今でも夢を見ているかのようでした。

ヴィクトリア駅でイギリス国内用の「ブリティッシュ・ブルマン」に乗り込み、ギリシャの踊り子を描いた寄木細工の食堂車「アイビス」の整えられたテーブル席に座ると、大きく揺れて電車が走り始めました。

すぐにフルートグラスに桃のジュースとシャンパーニュが注がれ、ウエルカムのベリーニがサービスされます。日本ではただくベリーニとは違って、酸味がかなり強く驚いていると、「日本みたいに、トロツと甘い桃はヨーロッパにはないよ」と同行者から教えられ、これから始まる未知なる旅に期待が高まりました。

英国式のブランチが香り高い紅茶で締めくくられると、乗り換えのためいったん下車。いよいよ寝台車に乗り換えます。自分専用のコンパートメントは思ったより広く、テーブルにはシャンパーニュが置かれていました。

マホガニーの美しい扉で覆われた洗面所を開けると、充実したアメニティー。何よりも驚いたのが、列車内でありながら、洗面所にあるグラスもカラフェもすべて贅沢なガラスであること。それらが美しく固定して設置されていました。この美意識にたまらなく嬉しくなりました。

ロンドンの花屋さんで買ったバラとヒヤシンスを洗面所に入れ、ソファアベツドで一息。そして夢見心地な気分ディナーのためにお召し替え。最初にいただいた案内には、タキシードの紳士やドレスアップした淑女たちの写真とドレスコードが記載されていたのですが、半信半疑



VIRGIN ATLANTIC

ヴァージン アトランティック 航空

もう一つの旅の思い出が生まれる空間
ヒースロー空港ラウンジ「ザ・クラブハウス」



- 1.スタイリッシュなインテリアが印象的なヒースロー空港ターミナル3にある空港ラウンジ「ザ・クラブハウス」。アップパークラス専用のラグジュアリーな空間だ。
- 2.カクテルバーの14mのカウンターは、ザ・クラブハウスの名物の一つ。ゆっくりりと寛ぐのに最適。
- 3.ニューヨークの有名サロン「Bumble and bumble」の専任スタッフが常駐する。滑走路を眺めながらのヘアカットは貴重な経験となるはず。

Information

Virgin Atlantic

www.virgin-atlantic.com

【お知らせ】ヴァージン アトランティック航空では、2015年1月31日ロンドン（ヒースロー）発東京（成田）行き、同年2月1日東京（成田）発ロンドン（ヒースロー）行きを最後に、東京（成田）ーロンドン路線が廃止となります。

アップパークラス専用のチェックイン・エリア「アップパークラス・ウィング」もヒースロー空港ターミナル3に。ショーファーカーサービスを利用すれば、送迎車に乗ったままのチェックインが可能で、最短でわずか10分で空港ラウンジに到着できる。





美しい花々に彩られた「ザ・プロムナード」のエントランス。アフタヌーンティーはここで堪能できる。



「ドーチェスター・スイート」はアレキサンドラ・シャンパリモーが手掛けた優雅な空間。



ディナーの後は「ザ・バー・アット・ザ・ドーチェスター」で見た目にも美しいカクテルを楽しみたい。

メイフェアに佇む英国の正統 The Dorchester, London

ザ・ドーチェスター ロンドン



評判の高いザ・ドーチェスターのアフタヌーンティー。



ロンドンのメイフェアにある5
つ星の老舗ホテル、ザ・ドーチェ
スター。いかにも英国らしいク
ラシックな色合いの花装飾はゴ
ージャスで圧巻。このサロンのアフ
タヌーンティーは常に評判が高
く、ティーやランチには訪れたこ
とはあったのですが、宿泊は初め
てです。

さすがに女性に人気のパリの
ムーリスをはじめ、ラグジュア
リーなホテルを展開するドーチェ

スター・コレクション。お部屋の
ベッドやバスタブの快適さも、
サービスもすべてが贅沢でパー
フェクト。そして評判のスパは、
フエイシャル・トリートメントは
Carol Joy London、トリートメン
トはKerstin Florianで、驚くほど
口角が上がりびっくり。技術の
高さもちろん、美しいインテリ
アのリラックスルーム、とろける
ような至福の時間でした。

アレキサンドラ・シャンパリモー
が手掛けたドーチェスター・ス
イートは、甘すぎず、シノワズリー
な要素を取り入れた居心地の良
い空間。壁のランプから、タッセ
ルまでもが、すべておしゃれ。「こ
のスイートには、どんな方が宿泊
されるんでしょう？」と思ってい
たら、ホテルエントランスには、
見たこともないような特別仕様
の高級車が並んでいました。

Information

The Dorchester, London

Park Lane, Mayfair London,
W1K 1QA, UK
TEL 0120-086-230（日本での予約）
<http://www.dorchestercollection.com/>



ジョージ・クルーニーが命名したカクテルもある「ガビアーノ・バー」。



写真上／ホテルへは専用のシャトルボートでアクセスする。
写真下／庭には緑が生い茂る。まさに喧騒とは別世界が広がる。



スパでは健康とスキンケアを重視。プライベートテラスのある静かな環境で上質なトリートメントを体験することができる。



ラグジュアリーな雰囲気に包まれるメインダイニング「オロ」。ミシュランスターシェフであるダビデ・ピセッティ氏による独創的な料理を五感で堪能したい。

Information

BELMOND HOTEL CIPRIANI, VENICE

Giudecca 10
30133 Venice Italy
TEL 0120-229-800 (日本での予約)
<http://www.belmond.com/>

また、ジョージ・クルーニーが、彼の母親の名前をつけた、パッションフルーツとテキーラのカクテル「ニーナ・パッション」が人気の「ガビアーノ・バー」もおすすめです。

緑と水に囲まれた壮麗なホテル BELMOND HOTEL CIPRIANI, VENICE

ベルモンド ホテル・チプリアーニ

ヴェネチアのサン・マルコ広場からホテルの専用シャトルボートで5分ほどの対岸に、多くの著名人やセレブ御用達の「ベルモンド ホテル・チプリアーニ」があります。ここは、観光客の喧騒から離れ、贅沢でプライベートな時間を過ごせるラグジュアリーなホテルです。ジョージ・クルーニーが結婚前夜、このホテルのスイートに宿泊し、友人たちとパーティーを開いたことでも有名です。

広い敷地内には、庭園、スイミングプール、テニスコートなどがあり、美しい庭園に面した「カサノバ・ビュティ&ウエルネス・センター」では、数々のトリートメントが受けられます。ヨーロッパのスパは、恥ずかしがり屋な日本人にはちよつと苦手という方も多いのですが、このスパは気遣いが行き届き、安らかな香りでリラックスできます。

ホテルのメインダイニング「オロ」は、アメリカの建築家、アダム・ティハニーが手がけた素敵な空間。目の前には美しいヴェネチアのラグーンが広がっていました。イタリア語で「黄金」を意味する通り、金箔で加工されたドーム型の天井からはムラノガラスのシャンデリアがゴージャスに煌きます。作り出されるお料理はどれも独創的で、盛り付けも美しくお味も繊細。ソムリエおすすめのオーガニックワインといただくと格別です。